

自分の考えをもち、友とともに見方や考え方を 高めていくための新聞活用方法とその効果をさぐる

指定校2年次 伊那市立高遠中学校 間宮 亜武呂・伊藤 奨

1 本校のNIEの現状

23年度は、NIE実践校指定第2年目であった。22年度は9月から12月の4ヶ月間、8紙の新聞を購読させて頂いた。これらを廊下に並べ生徒がいつでも見られる状態にしたところ、休み時間等に新聞の前に立ち止まって、新聞を見たり新聞を読み比べたりして、新聞に対して興味と読む時間が増えた様子だった。多くの新聞が身近にあり、興味を示す生徒が多かった。また、多くの新聞や記事をストックできたと、信濃毎日新聞のデータベースを使用できるようになった事で新聞の記事を教材化しやすく、授業や学活で活用する機会が増えた。

23年度も、9月から4ヶ月間8紙の新聞を購読させて頂き、廊下に掲示することができた。昨年同様、多くの生徒がその日の新聞記事に興味を持ち、新聞を読む生徒が多く見られた。また社会科で新聞スクラップに取りこんでいたために、時事について興味を持った生徒も多かった。

2 NIE実践のねらい

高遠中学校の学校教育目標「学則得」の源は「高遠の学」にある。阪本天山がその基礎を作り、多くの人材を輩出した高遠藩校である進徳館の学风は、知行合一・思想即行実の学問、「実学を旨」とし、「高遠の学」と称された。そして、進徳館の塾生であった伊澤修二はこれを「学則得」と一言で表した。「学と得は一体であり、知と行は表裏、学は徳である。学んで知りえないことはないという徹底追求の姿勢である」と実学尊重の考えを示している。そこで目指す姿とは「知育、徳育、体育の調和を求め、情操のいよいよ高く深く人間存在を求める。いよいよ高きもの、いよいよ遠きものを仰望する実践の姿」であり、自立(自律)できる人間の育成を目指している。このように、学校教育目標「学則得」は、学んだことを単に知識にとどめておくことなく、実践活動を重ねて自らの体で具現し、より自分らしく生きる高遠の子たちの育成を願いとしている。また高遠の学は、友と意見を交わし合い、互いに教え、学び合い、互いに知識を深めていく「輪講」によって培われていた。そこで本校の研究においては「輪講」につながる「グループ学習」によって、共に学び合い考えを深めあっていく授業を大切に考え、本校の全校研究テーマとしている。

そして22年度からNIE指定校を受け、全校研究テーマによせて「自分の考えをもち、友とともに見方や考え方を高めて行く」ために、どのように新聞が活用でき、どのような効果が出るかを実践の中から探っていこうと考え、本実践テーマを設定した。

3 研究の概要

(1) 実施した教科

○東日本大震災を題材とした「総合的な学習の時間」「道徳」「特別活動」の実施

東日本大震災という未曾有の大災害が起きた今年、毎朝短学活の時間に実施している日直による「気になるニュースのスピーチ」で生徒が選んだ記事のほとんどは震災に関するものであった。生徒の震災への関心は高く、生徒は「今どうなっているのか知りたい」という願いを持っており、また教師も震災から学ぶことは多いと考え、東日本大震災を題材とした学習を「総合的な学習の時間」や「道徳」、「学級活動」「社会科」の時間で積極的に行うことにした。また、学習資料は、現時点での正確な情報が得られる新聞が一番適していると考え、新聞資料を中心に扱った。

(2) 新聞提供状況

東日本大震災に関連する記事は膨大だったので、各授業で扱う記事は教師の方で選択し共通の記事で話し合いの活動を行うようにした。また、特集記事等は教室に掲示するようにした。購読中の新聞は図書に保存しておき、1週間を過ぎたものから授業等で切り抜いて良いものとし、授業で活用できるようにした。

(3) 新聞を取り入れた実践をする上で特に工夫したこと

N I Eの公開授業を11月に行った。東日本大震災や放射能への関心はずっとあったが、約8ヶ月が過ぎたところでの公開授業だったので、記憶が薄れている生徒がほとんどだった。そこで、図書館に保存されている震災当時の新聞や「信濃毎日新聞にみる東日本大震災」を見直すことで、震災の様子や被害について思いだし、新たに関心を奮起させることに新聞記事を用いた。また、自分が感心を持った記事をスクラップしてまとめ、掲示したり、特集記事を掲示したりして、クラス全体の関心も高めるようにした。

話し合い活動で扱う記事は、新聞記事の量が多く、語句も難しい内容が多いことと、同じ記事を基にして自分の考えを持ち、説明するためには共通の記事の方が良いと考え、教師が選定した。また、生徒に読ませたい個所には線を引くなどして、生徒が情報をつかみやすくした。

3 N I E実践の内容の記述で留意していただきたいこと

単元の目標

生徒が自ら知りたいと考えている放射能や原子力発電について、新聞を中心とした資料をもとに調べ、正しく理解するとともに、原子力発電継続の是非について、被災者の方の思いを考えたり、友と話し合ったりすることを通して、より多面的・多角的な視点から自分なりの判断することができる。また、現代社会の様々な現象に対する見方・考え方を学び、新たな課題について自ら考えていこうとする態度を育てる。

研究の仮説

○このような生徒たちに

- ・ 社会への関心が高く，ニュースや新聞を読んで世の中の動きをとらえようとする。
- ・ 放射能について不安があり，自分達が安全なのかどうかを知りたがっている。
- ・ 放射能について知りたがっているが，自ら調べようとしない。言葉が難しく，また，情報が多すぎて，よく理解できない。
- ・ 原子力発電継続の是非についての世論が高まっているが，原子力発電についてよく知らず，判断ができない。また，判断ができていても，安全性などの一面のみを捉えた判断になっている。
- ・ 東日本大震災への記憶が薄れ，被災者の方の気持ちよりも，自分の生活や安全に目が向いている。



○このような手だてで

- ・ 現時点でのできるだけ正確な情報を伝えるために，新聞記事を学習資料の中心とする。
- ・ 情報量が多く，また語句が難しいため，生徒に理解しやすい新聞記事を教師が選定する。また，生徒に読んでもらいたい部分には線を引き，生徒が必要な情報を得やすくするよう工夫する。
- ・ 東日本大震災の被害を伝える新聞記事をスクラップし，教室内に掲示する。また，学習で使用した単元プリントを拡大印刷し，学習内容を振り返りやすくする。
- ・ 放射線に不安を持ちながら福島県内で生活する人々や，放射線を逃れて県外に避難した人々の様子を新聞記事で紹介し，被災者の方々が今どんな気持ちでいるのかを考えさせる。
- ・ 資料をもとに，日本がなぜ原子力発電を行ってきたかについて調べ，原子力発電が行われている背景を理解させる。その際，再生可能なエネルギーの実用化の可能性や，原子力村の問題，計画停電の影響についても扱う。
- ・ 学習問題「日本は今後原子力発電をどうするべきだろう」について自分の考えをまとめる際，単元の振り返りカードを利用し，今までの学習内容やその時に考えた事を想起しやすくする。
- ・ 学習問題について小グループでの話し合い活動を2回行う。1回目の話し合いでは，自分の考えと同じ立場の友と話し合いを行い，自分の考えをさらに深め，2回目の話し合いでは，自分の考えと異なる立場の友と話し合いを行い，自分の考えを練り直すことができるようにする。



○願う姿

- ・放射線に関わる正しい知識を得て、正しく放射線を恐れることができる。
- ・被災者の方の気持ちに心をよせ、被災者の方々を支えるために何が必要かを考え、行動することができる。
- ・できるだけ広い視野で原子力発電が捉えられるようにする。また、日本の電力について課題意識を持つとともに、節電への意識が高まる。
- ・2度の小グループでの話し合い活動により、多面的多角的な視点から学習問題に対する自分の判断ができるようにする。
- ・現代社会の様々な現象に対し、新たな興味や疑問を持ち、進んで新聞などから情報を得て学んでいこうとする意欲が持てる。

実践授業

①放射線の人体への影響を調べる

「放射線」「放射性物質」「放射能」とは何か、放射線をどれだけ浴びると危険なのか、外部被ばくと内部被ばくの違いなどについて、朝日新聞の子ども向けの記事を元にしてまとめた。また、チェルノブイリ原発事故では、どのような被害が出たかを調べ、放射線の人体への影響について理解を深めた。生徒は高濃度の被ばくは危険であることを知る一方、自然界からも放射線が出ていることを知り、放射線に対し過剰に反応するのではなく、正しく恐れることの大切さを感じることができた。

②現在の放射線量について調べる（新聞→実際の調査）

福島県と長野県の放射線量や農作物の放射線の汚染状況を新聞記事から調べた。また、ちょうど市教委による学校の放射線量調査があったため、生徒ともに校内の放射線量を調べ、年間被ばく量を計算した。新聞記事などで伝えられている放射線量の測定を実際に体験できたことにより、生徒はこの問題を身近な問題ととらえ、追究意欲を持って活動することができた。

③被災者の方々の気持ちを考える（道徳）

廊下でハードルの練習をしている生徒の新聞記事の写真を導入資料として、放射線を気にしながら生活をしている福島の人々の気持ちや、故郷を離れ県外で生活をしている人々の気持ちを記事から推察した。また、避難先で「放射能がうつる」といじめられた子どもの記事や、松商学園に交流に来た福島の高校生が涙を流して温かい歓迎に感謝したという記事を読み取り、被災者の方々へ思いを寄せるとともに、放射能汚染の影響を学ぶことができた。

生徒の感想：原発の事故で不安を抱えて生きる人たちの事を思えば、放射線がうつるという偏見でどれだけ傷つくか考えて、間違った知識で接することもなくなるだろうと思った。正しい知識を身につけてそういうことがなくなってほしい。僕はちゃんと放射線の事を知れてよかったし、安心できる場所を僕たちが作っていかなくやだと思った。

④日本が原子力発電を行ってきた理由を考える

日本のエネルギーに関するDVDや社会科資料集、新聞記事から、日本の資源や発電方法、再生可能なエネルギーの長所・短所について学んだ。また、原発推進派の町長が原発事故後に当選したという記事から、原子力マナーに頼る原子力村の存在について考えた。さらに、電力不足から行われた計画停電の状況を振り返り、計画停電による日常生活や経済への影響について考えた。前時に福島の人々に思いを寄せ、原子力発電に反対と考えていた生徒も原発の重要性を知り、判断に迷う様子が見られた。

⑤今後の原子力発電について考える（NIE公開授業）

学習問題「今後日本は原子力発電をどうすべきか考えよう」について、「今すぐやめるべき」「徐々にやめるべき」「続けていくべき」の3つの立場に分かれ、小グループでの話し合い活動を行った。生徒達は同じ立場の考えを持つ友や、違う考えを持つ友とそれぞれグループを組み、今まで学習してきた新聞資料を自分の考えの根拠として、活発に意見を交換し合った。話し合いを通して、立場が変わった生徒も、変わらなかった生徒もいたが、すべての生徒の考えに深まりが見られた。



生徒の感想

- 話し合いをして、いろんな人の意見を聞いたけど、僕はやっぱり徐々にやめていくべきだと思う。もう少し原発を使っていって、その間に再生可能エネルギーで電力を補えるようになったらやめていいと思う。原発の勉強をして、この意見にたどりついたけど、してなかったら意見も違ったかもしれないので、原発についていろいろ知れて本当によかった。
- 今まで知らなかった原発の事を知って、そして福島の人々のことを考えてみたりしたけれど、やっぱり一度信用していた原発が事故にあって、しかもその後避難先で、差別を受けたりするとつらいと思う。原発はやっぱり電力をつくるのに使えると思うけど、事故による放射能もれとかが心配だから、再生可能エネルギーをもっと使えるようになればいいと思う。これを自分ももっと知らなきゃだし、他の大勢の人にも知ってほしいと思った。
- 今まで学習してきて、一番いいのは害がない原発が作れるなら作ってくれたほうが安全だし、経済も安定すると思う。最初は全く知らなかったことが分かるようになったし、今まではなんとなく読んでいた新聞の言葉もそんな意味があったんだなあーと思った。自分達にもできる、節電、募金をしていきたいです。

本単元の学習の成果は、生徒の感想にあるように、生徒自身が「この学習で放射能や原子力発電について、知れてよかった」と学びの価値を見いだしていることである。また、「今後も知っていききたい」「自分にできることをやっていきたい」というように、今後も自分なりに考えていこうとする意欲を持たせたということも成果である。これは、被災した人々へ思いを寄せ、この問題に対する使命感を生徒が感じたこと、さらに、難しい内容にも関わらず自分なりに調べ、考えを深めることができたという充実感を得ることができたからではないかと考える。この学習を支えたのは、今の生の状況を伝える新聞記

事であり、新聞記事を使った学習の効果を強く感じる事ができた。

⑥学級活動 単元名『命を守るために 津波てんでんこから学ぶ』 中学1年生

避難訓練の日に実施。「なぜ釜石市の小中学生はほとんど犠牲を出すことなく逃げることができたのか」を学習問題に設定し、記事を読み取った。同じ小中学生のことであるため、生徒は大変関心を持って授業に取り組み、その後の避難訓練にも真剣に取り組むことができた。

⑦道徳 単元名『フクシマ50 原発で働く人々』 中学1年生

原発事故当時、福島第一原発に残って作業を続けたフクシマ50と呼ばれている人々や、現在原子力発電所で事故の終息に向けて活動している人々について扱った。「なぜ危険だと分かっている場所で働いているのだろうか」という学習問題を設定し、新聞記事から人々の思いを推測した。危険を顧みず家族や地域、日本の為に働く人々の姿に生徒は様々な思いを持つことができた。

5 研究のまとめ

「東日本大震災」における原発問題を題材としたNIEの実践を行ったが、新聞記事を読むことで生徒たちは、放射能についての正確な情報を知り、被災された方々に思いを寄せ、原発の利便性に目を向けながら、今後の原発のあり方について自分なりに考えの深まりのある判断をすることができた。そして、本単元の学習の最大の成果は、生徒自身が「この学習をして、この問題について知ることができてよかった」と学びの価値を自ら見だし、「自分のできることをやっていきたい」というように、今後も自分なりに考え、実践していこうとする意欲を持つことができたという点である。だから、「今後日本は原子力発電をどうするべきか考えよう」という難しい課題に対しても、新聞の記事を基にして自分の意見を持つことができた。自分の意見をしっかりと持つことで、グループ内の討論もしっかり行われ、その中で自分と同じ考え方や違う考え方について聞き、新たに自分の考えに取り入れ、さらに自分の考えを広げ、お互いに学び合うことが出来た。今回扱った一連の「東日本大震災」の授業における新聞記事の活用は自分の意見をしっかりと持つ事にとっても有効であったと考える。これらの他にも震災に関わる事実で生徒に考えさせたい内容は多くあり、今後も実施していきたいと考えている。



また、他の活動も新聞記事を元にした事実（特に人の行動に関わる事実）を扱っているため、生徒は大変興味を持ちながら真剣に考えることができた。これらの学習を支えたのは、今の生の状況を伝える新聞記事であり、東日本大震災を扱うためには必要不可欠なものであったと考える。この実践を通し、新聞記事を使った学習（NIE）の効果を強く感じる事ができた。

6 残された課題

通年を通して、社会科で新聞スクラップの宿題を出してきた。自分で記事を選び、コメントを書く事を続けたことで、時事へ関心は継続していた様子だが、新聞購読中は更に関心が高まっていたように思われる。しかし、購読期間が終わってしまうと関心が少し薄れたように思われる。生徒達がすぐ手の触れられる所にいつも新聞があると良いと実感している。

また、今回のように膨大な記事を扱うとき、どんな記事があるのか調べ、授業に最適と思われる記事を選定していく事に膨大な時間がかかってしまうことが課題と思われる。授業の構想にピッタリと合う記事を見つける事はかなり難しいが、記事の中には資料集よりも最適なものがあるということも多い。各新聞社のデータベースの活用も有効であるが、欲しい記事を素早く探せるとさらに新聞を活用できる。